

長野県立歴史館たより

2017年 **春**号 vol.90

特集

平成29年巡回展

長野県の遺跡発掘2017



須恵器三足短頸壺

(奈良から平安時代 豊丘村中手田遺跡出土)

県民の皆様が足下からふるさとを考える契機を提供します

長野県立歴史館長 笹本 正 治

私たち長野県立歴史館の「使命」は、次のようになっています。

長野県の歴史に関する調査研究に基礎をおきながら、埋蔵文化財（考古資料）、歴史的価値ある文書等の歴史資料の収集・整理・保存を通じて、県民の歴史遺産を子孫に引き継ぐ活動を市町村と連携して行うとともに、県民が歴史をふりかえり、未来を展望し、また学び、憩い、交流する場としての役割を果たします。

このための「基本目標」が次の4点です。

- (1)長野県民の歴史遺産を子孫に継承するための取組を果たします。
- (2)未来を映す歴史知識の泉としての役割を果たします。
- (3)楽しむ場・憩いの場・交流の場としての役割を果たします。
- (4)歴史情報センターとしての機能を果たします。

つまり、私たちはまず、長野県の歴史資料を収集し、整理し、保存していかなければなりません。そのことを通して、自ら研究し、あるいは研究素材を県民の皆様提供し、長野県のよりよい未来を作る手助けをしていきたいと思っています。同時に歴史館は県民の皆様が楽しみ、憩い、交流する場となるよう努力を重ねます。

あえて言うならば、(1)はバックヤード、(2)は職員、(3)は展示、(4)は図書室などが、その中心をなします。ところが、ほとんどの方は歴史館というと展示しか思い浮かべません。バックヤードは存在すらご存じないのです。私たちはもう一度基本に戻って、資料収集、整理、保存、研究、展示、教育の順番で、仕事をしていきたいと思っています。そのためにも、歴史館とは何かを県民の皆様にご理解いただけるように広報活動を、さらに積み重ねていきます。

歴史館の役割の一つに、公文書館機能があることをご存じでしょうか。本館には、長野県の公文書だけでも実に57,000点以上が収蔵されています。これらの文書からは長野県の歴史が浮かび上

がってきます。それを前提にして、本年は長野県の明治維新150年をテーマにした夏季企画展を計画しています。膨大な公文書の中から、長野県がどのようにできあがってくるか、本館職員の力のほどをお楽しみください。

展示は見応えがあり、多くの人が知っている物を並べると、観客が増えます。これは自分の知っていることを目にして、確認したいという気持ちに応える展示です。しかし、私はこれまで気がつかなかったことに気がついてもらう、いわば自分とは何かということを振り返る契機になるような展示が望ましいと考えます。この企画展は、文書を中心として並べますので、皆様のご存知ではない文書ばかりが並びます。派手ではありませんが、私たちが住んでいる長野県はどのようにできてきたのかが、文書から確認できることでしょう。

秋季には縄文土器の企画展を予定しています。長野県は縄文王国です。国宝に指定されている5点の土偶の内、2点が長野県から発掘されています。長野県から出土した縄文土器は日本全体の中から見ても優品が多いといえます。そのすばらしさが実感できるよう、近県の土器を含めて意欲的な展示をいたします。

私たちは本年も展示のみならず、積極的に行う講演会など、あらゆる機会を通して県民の皆様が、足下からふるさとを考える契機を提供できるよう、頑張ります。



学校見学も当館の柱の一つ。さらなる充実を目指します

平成28年度
秋季企画展

木曾の宝を振り返って

平成28年9月17日から11月27日までの61日間にわたって開催したこの企画展は、歴史館全体を使って木曾の魅力を最大限にお届けしたいと考えて実施しました。企画展示室には旧石器時代から現代に至る資料が並び、さらには、第2展示室、常設展示室に関連展示、廊下にはポスターを掲示しました。7,000名を超す皆様にご観覧いただきました。

お客様のアンケートを拝見すると、満足度は約95%で、大変好意的なご意見を多数頂戴しました。その中から展示に対する感想を紹介します。

貴重な資料がこんなに身近に見られて感動しました。遠い歴史のできごとが地元の歴史とつながっていることが実感できる素晴らしい展示だったと思います。
(北信・女性)



鰐口、絵馬など、大変見応えがあった。木曾の自然も体感したい。
(東信・男性)



藤村展示に感動。学生時代に木曾路の落合宿から馬籠宿まで歩いたのを思い出しました。よい思い出となります。
(福岡県・男性)



お六櫓や木曾路写真が印象に残りました。これまで通過するばかりで、あまり目に留めていなかった木曾の歴史、風土を再認識することができ、好企画でした。改めて現地を訪ねたいと思いました。
(南信・男性)



仏像をはじめ、木曾にも素晴らしい物がたくさんあることを改めて知りました。
(中信=木曾在住・女性)



堆朱座卓や乙若地蔵が印象的でした。木曾を歩いただけでは分からない歴史や文化を知ることができました。
(東京都・女性)



地域ごとの文化財展示はよくあるようでありません。今後も続けていただくとありがたいです。
(神奈川県・男性)



地元木曾からも多数のお客様が来館されました

今回の企画展では、講演会・講座、ギャラリートークのほか、各種イベントを多く行いました。木曾町開田高原からは2頭の木曾馬がやってきました。乗馬体験をされた方は一様に笑顔になっていました。南木曾町の子どもたちと地元保存会による田立歌舞伎と田立花馬祭りの発表では、「木曾の伝統行事の奥深さに感動した」という声を頂戴しました。また、地域に伝わる唄や踊りの披露の場を設け、大桑村と木曾町開田高原の地元小学生及び地域の皆様には大観衆の前で発表いただきました。展示と併せて木曾という地域に対する理解を深めていただけたと思います。

木曾の皆様はじめ、ご来館くださった皆様に心より感謝申し上げます。



開田高原に伝わる唄の披露（森將軍塚まつり）

平成29年巡回展「長野県の遺跡発掘2017」

本県には14,684箇所の埋蔵文化財包蔵地があり、毎年350件ほどの発掘調査が実施されています。

毎年多くの考古資料が発見され、その一部が公表されていますが、その反面、過去に調査された貴重な考古資料が、展示されてはいるものの多くの県民の皆様の目に触れる機会が少なかったり、収蔵庫に保管されたままとなっていたりする現状があります。

今回の展示では、平成28年度に発掘調査された最新の出土品に加え、県内市町村教育委員会が保管しながら、なかなか多くの県民の皆様の目に触れることがなかった資料を展示します。

展示は次の3コーナーで構成します。

(1) 長野県埋蔵文化財センターの調査

平成28年度に調査された栄村ひんご遺跡、長野市小島・柳原遺跡群、朝日村山鳥場遺跡、飯田市川原遺跡の出土品の展示を予定しています。

ひんご遺跡で調査された主な遺構は、縄文時代後期の竪穴住居跡や敷石住居跡8軒、配石墓1基、土坑241基でしたが、中期の貯蔵穴1基から新潟県内におもに分布する「火焰型」・「王冠型」土器が多量に発見されました。

小島・柳原遺跡群の調査からは、正倉院や法隆寺に伝世されているものに類似した塔鉢形合子の蓋が出土しました。

山鳥場遺跡では縄文時代中期の竪穴住居跡8軒ほかが発見されました。それぞれ1軒の大きさは6m程度で、中央に石で囲んだ炉がつくられていました。

川原遺跡では縄文時代中期から晩期にかけての竪穴住居跡10軒ほかが発見されました。ほとんどの住居跡から石錘（網のおもり）が出土してい

ることから、天竜川で漁をしていた様子がうかがえます。

(2) 県内市町村教育委員会の調査

中野市安源寺城跡1号墳丘墓は、平成10年に発掘調査が行われました。古墳時代初頭の墳丘墓で、周溝から「東海系土器」・「北陸系土器」が出土しました。これらの土器の出土から弥生時代終末から古墳時代初頭頃のヤマト王権が国家形成へ向かう直前のシナノの社会の様子をうかがうことができます。

長野市史跡大室古墳群大室谷支群は、昭和59年（1984）から平成8年（1996）にかけて学術調査が行われ、その結果平成9年（1997）7月28日に国史跡に指定されました。調査された古墳の多くが盗掘を受けていることから、発見された遺物の多くが破片資料となっています。そのような状況ですが168号古墳からは大室古墳群被葬者と馬匹生産との関係を考えさせられる「馬形土製品」がほぼ完全な形で発見されました。



写真1 大室古墳群168号古墳出土馬形土製品
長野市教育委員会蔵（全長19.1cm）

豊丘村中手田遺跡は、豊丘村役場新庁舎建設に伴い、平成11年に発掘調査が行われました。調査された遺構は平安時代の竪穴住居跡5軒です。

この中でも特に一軒の竪穴住居跡は柱に礎石を持った南北9.6m、東西9.1mと大形の住居で、北隅には外に南北1m、東西2.45mの張り出し部が造られていました。この住居からは多くの土器が出土しましたが、特に注目されるのが「須恵器さんそくたんけいこ」（表紙写真）で、県内では初めての発見となりました。

青木村塚穴古墳、松本市柏木古墳、茅野市永明寺山古墳からは、象嵌装（銀象嵌）大刀や馬具が出土し、6世紀末葉以降のシナノの舎人（近衛兵騎馬武人）の出現を示唆する資料となっています。



写真2 塚穴古墳出土象嵌装大刀
青木村教育委員会蔵

(3) テーマ展示「黒曜石」

長野県には本州最大規模の黒曜石原産地があります。その周辺には旧石器時代から縄文時代にか



写真3 星糞峠黒曜石原産地遺跡出土の黒曜石ほか
長和町教育委員会蔵

けての遺跡が濃密に分布しています。発掘調査の成果により、時代や原産地との距離などの違いから、当時の人びとがさまざまな活動をしていたことがわかってきました。旧石器時代の長和町星糞峠（ひろつばら）遺跡、縄文時代に黒曜石が採掘された二つの国史跡、長和町星糞峠黒曜石原産地遺跡と下諏訪町星ヶ塔黒曜石原産地遺跡の調査資料などを展示します。道具として最適であった最古の信州ブランド「黒曜石」を通して当時の人びとの生活のすがたを想像してみたいと思います。

展示資料はいずれも地域の歴史を語る上で欠かせない資料です。これらを県民の皆様に広く公開することで、遺跡を身近に感じていただき、あわせて埋蔵文化財保護へのご理解とご協力が得られれば幸いです。

今年も長野県立歴史館（千曲市）のほか3か所で巡回展を行います。日時は下記の通りです。



会場と会期



①長野県立歴史館（北信）

3月18日(土)～6月25日(日)

②長野県伊那文化会館（南信）

7月29日(土)～8月20日(日)

③安曇野市豊科郷土博物館（中信）

8月26日(土)～9月24日(日)

④浅間縄文ミュージアム（東信）

9月30日(土)～11月26日(日)



関連行事



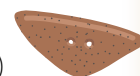
長野県立歴史館会場

講演会 平成29年4月22日(土)

講師：長和町教育委員会

大竹幸恵氏

演題：「最古の信州ブランド黒曜石を
世界に発信」



縄文人も黒曜石を等級分けして貯蔵した？

1984年(昭和59)に中央自動車道長野線建設に伴って発掘調査がされた岡谷市大洞遺跡^{おおぼら}では黒曜石が大量に出土しました。なかには拳大の原石を積み上げるような状態で出土した例もありました。

遺跡は塩嶺山地山麓を刻む谷頭部南向き斜面に、縄文時代前期末～中期初頭の竪穴住居跡が3軒と土坑、集石炉と黒曜石の集中ブロックが発掘され、小規模な集落跡であったと考えられます。

出土した黒曜石の剥片^{はくへん}、石核^{せっかく}、原石の重量は合計60kgを越え、竪穴住居跡が3軒という小規模な集落にしては黒曜石の量が多く、黒曜石の加工・流通に関わる遺跡であることが想起されました。「ブロック」と称した黒曜石の集積遺構は2大別されます。黒曜石原石を集積した「原石集積」と黒曜石の小石片いわゆるチップが数メートルの範囲に散布している「碎片集中」です。今回はこの「原石集積」という遺構の性格について考えてみます。

この「原石集積」は信州黒曜石原産地の周辺である霧ヶ峰から八ヶ岳山麓を発掘するとしばしばみられることから、「黒曜石集積」などの呼称で黒曜石貯蔵例として注目されていました。そのひろがりには山梨県下までみられるようです。時期的には前期にはじまり晩期までみられますが、中期が多い傾向にあります。また、出土状況として、屋内、つまり竪穴住居跡内の例と屋外の二者があります。

さて、大洞遺跡では屋内例はなく、屋外で1～3、5、7号ブロックとされた5つの「原石集積」が発見されました(表1)。この5つの遺構の原石の大きさと形状についての特徴を観察してみると面白いことに気づきます。

大きさが群を抜いている2号ブロックは、最小の原石でも300gあり、他のブロックの最大原石をしのぎます。これをA群としましょう。次に、



写真1 大洞遺跡2号ブロックの「特秀級」？黒曜石原石
原石形状が直方体から角柱状からなるブロックがあります。それらはブロックごとに同じような大きさがそろっており、7号→1号→3号の順で順次サイズが小さくなっていきます。これをB群としましょう。残る5号ブロックは原石の形状、大きさともに不揃いなグループです。これをC群としましょう。

このA～C群の意味を考えるために大洞遺跡に近い同市梨久保遺跡^{なしくぼ}の黒曜石利用を見てみましょう。梨久保遺跡は中期を中心とした大集落で、大量の黒曜石が出土しています。遺跡には露頭にある原石をあまり選択することなく持ち込んでいるようで、30gを越える大型品は広域流通用、10gに満たない小型品は集落内に廃棄、中間品が自己消費用としているようです(小杉康1995「遙かなる黒曜石の山やま」『縄文人の時代』)。

梨久保遺跡の解釈を加味して大洞遺跡の黒曜石集積を考えてみると、A群は流通用のために貯蔵されていたといってよいでしょう。ではB群はどうでしょうか。中型品の自己消費用とも考えられますが、梨久保例よりサイズが全体的に大きいことからこれも流通用と考えてみましょう。そしてC群を自己消費用と考えてみてはどうでしょうか。現代のリング農家などによる出荷を想像してください。A・B群は出荷の等級にすればAは特秀品、Bは秀・優・良品、C群は自家用となり、ちゃんと振り分けをして貯蔵していたのではないのでしょうか。数千年前、大規模に黒曜石を採掘し黒曜石を流通させていた縄文人がいました。分配・流通される黒曜石もそれなりの等級(ランク)があったのではないのでしょうか。

表1 岡谷市大洞遺跡黒曜石ブロック一覧

遺構名	種類	数量	最大重量g	最少重量g	総重量g
1号ブロック	原石集積	12	97.7	29.6	689
2号ブロック	原石集積	7	790	305	2,740
3号ブロック	原石集積	7	77.7	9.2	311
4号ブロック	碎片集中	295			
5号ブロック	原石集積	7	94.7	34	438
6号ブロック	碎片集中	2,136			
7号ブロック	原石集積	4	170	89.2	551

没後70年 栗岩英治関係資料の公開



写真1 栗岩英治

1946年(昭和21)9月、長野県の近代史学の立役者の一人が亡くなりました。彼の名前は栗岩英治、昨年はその没後70年、これにあわせてその資料が公開されました。

栗岩は1878年(明治11)下水内郡外様村(現在の飯山市外様)に生まれました。外様村は寿^{ことぶき}自由党や北信自由党といった近代長野県の自由民権運動の先進地でした。栗岩は地域の中では平井三斧^{さんぶ}(漢学)、足立幸太郎(政治・史学)や北沢量平(考古学)といった師や先輩に学びます。栗岩の学問上のバックボーンはこうした地域の風土や人間関係によって形成されました。

栗岩は1902年(明治35)に政教社同人となり「日本及日本人」に投稿します。当時の代表的ジャーナリストで歴史家でもある徳富蘇峰^{とくとみそほう}に出会い、彼の紹介で栗岩は木更津新聞主幹として就職し、その後長野新聞編集長となります。こうして栗岩は新聞人としての地歩を固めていきます。

当時の新聞人のなかには、徳富(国民新聞)や山路愛山^{やまじあいざん}(信濃毎日新聞)、末松謙澄^{すえまつけんちよう}(東京日日新聞)などのように、古文書や古記録などの文献を考証しつつ、広い視野で歴史を論じるジャンルで活躍する者がいました。こうした分野を「史論」と位置づけることができます。

栗岩の歴史への関心は東京帝国大学の坪井正五郎^{つばいしょうご}、鳥居龍蔵^{とりりゅうぞう}などに影響を受けており、東アジアのなかの日本そして信濃という広い視野に立った歴史論を相次いで公開しています。また1929年(昭和4)長野県史編纂委員会が立ち上がると、その専任編纂委員に任命されました。『信濃史料』を編集する必要を説き、東京、米沢(山形県)や高野山(和歌山県)など県内外の膨大な史

料を調査・筆写(当時これを採訪と呼びました)して集めてまわります。これが『信濃史料』の基礎となりました。栗岩は従来のような読み物としての『県史』ではなく、歴史考証のために史料に基づいた史料集をまず刊行すべきだと強く主張したのです。このように栗岩は、近代ジャーナリストの一つのかたちであるマクロとミクロの視点を持ちあわせる「史論家」に位置づけることができます。

さらに信濃講座を主催し、1930年(昭和5)から1938年(昭和13)まで継続して臨地指導に当たりました。地域の教員たちとともに地域史料を現地の地形や字名^{あざ}などをくまなく踏査しながら読み込んでいくこうした姿勢を「わらじ史学」と呼んでいます。

1943年(昭和18)、脳卒中で倒れますが、「栗岩はその後も執筆・調査活動は続けました。下水内教育会主催の現地学習には次男にリヤカーを引かせて参加しましたが、その1週間後に亡くなりました。かばんの中には『信濃史料』第1巻に入る予定だった「信濃上代史序説」のみが残されていました。

栗岩の関係史料は信濃史料刊行会の事務局が置かれた信濃毎日新聞社より当館に寄贈され現在に



写真2 昭和21年栗岩英治日記



写真3 遺稿『信濃上代史序説』

至っています。また栗岩英治の最晩年の日記1冊が親族より当館に寄贈されています。

INFORMATION

インフォメーション

■2017年(平成29)
3月～6月の行事予定



3月

休館日
1～6
13・21
27

巡回展

「長野県の 遺跡発掘2017」

3/18(土)～6/25(日)

※内容の詳細は本紙
3～4ページを
ご参照下さい。

講座・イベント

やさしい信濃の歴史講座 「山と信州のあゆみ」

第7回 3/11(土)
テーマ：密教寺院と山
「続・東の牛伏寺・
西の若澤寺
一山寺の信仰史」
(原 明芳)

親子映画会

13時30分～15時
3/20(月・祝)・22(水)・
23(木)・24(金)

4月

休館日
3・10
17・24

講演会

4/22(土) 13時30分～
「最古の信州ブランド黒耀石を
世界に発信」
講師：大竹幸恵 氏
(長和町教育委員会)



歴史館でこどもの日 5/5(金・祝)

5月

休館日
8・15
22・29



象眼装太刀 古墳時代後期
青木村塚古墳出土
青木村教育委員会提供

考古学講座 第1回 5/20(土)

6月

休館日
5・12
19・26



馬形土製品 古墳時代中期
長野市大室古墳群168号古墳出土
長野市教育委員会提供

古文書講座

初級 第1回
A:6/4(日) B:6/15(木)
中級 第1回
A:6/3(土) B:6/15(木)
上級
第1回 5/27(土)
第2回 6/24(土)

歴史館ふるさと講座

第1回 6/3(土) 笹本正治
第2回 6/10(土) 山浦直人
第3回 6/17(土) 櫻井秀雄
第4回 6/24(土) 原田和彦
第5回 7/1(土) 青木隆幸

行事アルバム

※※ 歴史館に木曾馬がやってきました ※※



秋季企画展関連イベント「木曾馬と遊ぼう!」を3日間実施しました。計391名が参加し、ホンモノの木曾馬(現存するのは全国で約150頭とのこと)を見たり乗ったりしました。写真は、県

天然記念物に指定されている菜々号(牝・16歳)です。講座やギャラリートークも行い、木曾の歴史や文化に親しんでいただきました。

※※ やさしい信濃の歴史講座 ※※



歴史館を離れて、3地区での出前講座に出かけました。8月27日(土)は上田市立信濃国分寺資料館、11月19日(土)は箕輪町地域交流センター、12月3日(土)は松本市立博物館(写真)を会場にそれぞれ2つずつの講座を行いました。講座内容は各館のご要望をお聞きし設定しました。各会場とも用意した席がほとんど埋まり、非常に熱心にご聴講いただきました。

※※ 宮坂武男先生の資料が当館に寄贈されました ※※



長野県の山城研究の第一人者である宮坂武男先生より、これまでの研究資料一式をご寄贈いただきました。12月20日には当館にて、宮坂先生に阿部知事からの感謝状を当館館長より伝達しました。貴重な資料を今後活用させていただきます。宮坂先生が描かれた県下各地の山城の鳥瞰図の一部を館内に展示しましたところ、多くのお客様にご覧いただきました。

表紙の写真の解説

豊丘村中手田遺跡出土 奈良から平安時代「須恵器三足短頸壺」

(豊丘村教育委員会提供)

口縁部径9.8cm、高さ17cm、体部最大径21.1cm、底部高台9.5cmの短頸壺に三本の脚が付加されています。器厚の最も薄い部分は2mmで、工人の卓越した技術がうかがえます。胎土・成形・焼成の状態から8世紀後半から9世紀前半の猿投窯産の優品です。県内で発見された唯一の須恵器三足短頸壺です。

長野県立歴史館たより 春号 vol.90

2017年(平成29) 3月1日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6 電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp ホームページ: <http://www.npmh.net/>

印刷 奥山印刷工業株式会社